

心中宵庚申

上田村の段

五月雨ほど恋ひ慕はれて、今は秋田の落とし水、
軒の玉水疾くくござれ、繁くござれば名の立つに
玉水近き山城の、村は上田に家富みて、庄屋に並ぶ菅屋
根も内暖かに下女子、並んで紡ぐ綿車。
手廻りもよく幾はえか、庭に五つのたなつ物、積む蓬菜
の島田氏、平右衛門といふ大百姓、妻は去年の秋霧と、
消えても残る娘二人、総領かるに入贅を鳥飼より呼び迎
へ、妹千代も大坂に歴としたる贅取つて、身の入米は
上田の田畑の世話を焼き止めば、万事限りの俄病ひ、
姉のおかるは傍離れず、
台所には女子共、

「なんと、今朝から仕事の扱も往たではないか。ちと

駕籠の者、

「慥かにお届け申した」

と言ひ捨て帰るも足早やなる。

親の家さへ女気の、敷居も高く越えかねて、佇む有様
姉は見付け、

「ヤアお千代、おぢやつたか。定めて御病気の見舞ひ
ならぬ。ようこそよく。なぜ駕籠の衆止めやらぬ。

余所外でもある様に隔心がましい。酒一つ進せて去
なしゃいの。ソレ呼び戻しや」

と言へども

妹は差し俯き、嘆けば

共に嘆かれて、

「オ、道理々々。疾う知らせんと思ひしに、『この病
ひでは死なぬ。気の取りにくい舅。姑。持ったお千
代、贅半兵衛も忙しい時分、聞いたりと自由に来る
ことはなるまい。案じさするも不憫、沙汰するな』と
の病人の気にも逆らはれず。高麗橋の伯母様、常盤町
へも知らせぬ。オ、氣遣ひしやんな、京の御典薬に替

休まう。お竹、お鍋」

と呼び連れて、思ひくくに立ち出づる。

親のすやく転た寝の

隙を窺ひ女房は、心忙しく奥より立ち出で、

「コレく台所に人が一人もない。連れ合ひ平六殿は
淀川筋、新田開きの御訴訟に、大事の病人振り捨て、
の京上り。男共は皆野へ行く。エ、憎い女子共、我が
見る前ではちよびかはして、ちよつと立てば早やどこ
へ。大切な主の煩ひ、薬一つ暖めうともせぬ。下々
には何がなる。囲炉裏の下焚き付けぬか。次郎よ
く」

と呼び廻す門の口、

駕籠昇き据えて、

「申しく、大坂の新靱八百屋伊右衛門様から」

と駕籠の戸開くれれば

打ち萎れ、目元しぼよる縮緬の、二重廻りの抱へ帯、涙
の色に染め替えて。

泣くく出づれば

えてからめつきりと薬も廻り、今朝も粥を中蓋に三よ
そひ。病ひは請け取つて治す、とのお医者様の請け合
ひは本復も同じこと。そなたの顔御覧なされたら、い
よくと様の病ひはすつぱり治らう。嬉しいく、
お目に掛かりや」

と、ありければ、

「エ、とゝさんはお煩ひか。ア、知らなんだく。い
つからのことでござんする」

「なんぢや、お煩ひ知らぬか。そんならそなた、何し
に来た。エ、何悲しうて泣くぞ」

「恥しや、また去られて」

と、顔押し隠し噎び入る。

姉も驚く顔に血を上げ、

「ノウお千代、五度三度の贅入り嫁入りも世にある習
ひとはいひながら、悪いことは手本にならぬ。恥しい
くくと口で言ふばかりが、恥を知つたと言はれうか。
そなたも軽々三度の嫁入。尤も初めの男、道修町伏
見屋の太兵衛殿、心不定に身代を持ち崩し、佇み

もない様に成り果て飽かぬ別れ。その次は死に別れ。互ひに難はなけれども、人はそなたの辛抱がない故に去られた、去られたと非難付け、今度の嫁入りも追ひ出さるゝに間はあるまい。忘れても島田平右衛門が娘の風下にゐるな、と娘持った人々は、寄り合ひ茶呑話にもそなたの噂。今一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知り抜いて、『火に入り骨を砕かるゝとも帰るまい』『オ、必ず去られて戻るな』と念に念をつがふた今度の嫁入り、よう戻りやつた。と、様お聞きなされたら、お悦びなされうぞ。お顔見せる折がある、必ず声高に物しやんな。シテ半兵衛が暇の状、取つて戻りやつたか」

「イヤ、後の月半兵衛殿。てゝ御の十七年の弔ひのため、生れ故郷遠州の浜松へ。『戻り次第道具に添え、暇の状は後から。まづ往ね』と訳も言はず。お腹に四月たぐもない身を、姑御が手を取つて駕籠に引き摺り乗せ、酷い、辛い」とばかりにて、嘆くを

戻り駕籠の話で聞いた。お千代どんめでたい。去られて戻らしやつたげな」と、口も氣儘の途方なし、おかるは『ハッ』と余所よりも、親の聞く耳懼りて、「金蔵さん、嗜ましやんせ。聾はなし声低に言ふても済むこと。千代は去られはいたしませぬ、親の病氣を見舞ひの戻り。奥にはとゝ様すやくと寝てござる。目を覚まして下さるすな、低うく。モ同じくは往んで貰ひたい」と

と氣の毒がる程なほ声高、

「親仁寝てか、面白い。なんぼ隠しても慥かなこと聞いてゐます。お千代どん、幾度でも去られさつしやれ。あれこれの智達が踏み広げた田地でも、百姓の女房には大事な。おれが持つて一夜さも淋しい目はさせまい。去られて戻つた悲しいと氣を腐らし、必ず女房振り損ふて貰ふまい。去春貰ひかけた時、おれが方へござればよいに、惚れかゝつた一念、脇に足は止ま

見れば、痛々しく。

「子のあるものを夫の留守、隙くれる姑、心に一物あるはいの。伯母智ながらそなたの親分、高麗橋二丁目川崎屋源兵衛殿差し置いて、すぐにこゝへ突き付ける仕方憎し。よいく、こちらの人が京からの帰りを待つて詰め開かせ、モ大抵で暇は取らぬ。とはいへ世上の女夫中、去るといふこと誰が拵え、憂い目を見せる可愛や」

と嘆けば

『わつ』と泣き出す声、

「ア、高いく。障子のあなた、とゝ様の寝入り端泣くなく」

と言ひつゝも、伝ふ涙の血筋とて親は泣き寄る哀れさよ。

「平右衛門御氣色今日はいかゞ」

とつゝと入る、同じ村の金蔵、

お千代はちやつと姉の影、見付けられじと身を隠せば、

「ア、コレ隠れまいく。たつた今堤の茶屋で大坂へ

らぬ筈。入る毎々戻るといふもこの鼻に縁が深いからぢや。親仁殿に言ひ込んで、今日からでも我れら請け込む。姉御、大事に掛けて貰ひましよ」と喚けば

と喚けば

二人は死に入るばかり、冷やす心の

奥に手を打ち、

「かるよ、かるよ」

「アイ、アイく」

「南無三、親仁起きられた。金蔵が見舞ふたと言ふて下され。また明日御見舞ひ申さう」と

と帰れば

かるは腹も立ち、

「ア、コレく、往なずと千代をお貰ひなされぬか」

「ア、イヤく、言ふても大事の縁組。日を見て申し

出ださん」

と、へらず口して立ち帰る。

「とゝ様、お目が覚めたか」

と、姉が障子を開くる後より、

千代もおづく、差し覗けば、

夜着に凭れて起き伏しも、悩み苦しき老いの坂、誰が狩りすとはなければども、落ちくる肉に顔荒れて、見交はず親の顔と

顔、堪へかねて

「ノウと、さん、お薬上がつて今一度達者になつて下さんせ」

と、思はず知らず声立て、さめさめ嘆き伏し転ぶ。

父も見る目に涙ぐみ、

「大事な。つくと来い、つくと寄れ」

と膝近く、

「また去られて戻つたな。子に運ぶ親の心、ゐながら千里万里も行く。ましてや一つ家の内、寝ても寝られず。最前より何事も皆聞きしぞ。そも我れながらかくも心の変るものか。五十といふ歳の内は行歩心に任せずながら、心は若かりし昔に変わらず、気も強く義理にも引かれ、『おのれ重ねて去られたらば、顔も見まじ物言ふまじ』との我もありしが、六十に足踏込ん

では、年ばかり寄るでなく、月も寄り日も寄つて、病

ひには絡まる。身の衰ふる程いや増しに、案じらるゝは子の身の上。三度は愚か百度千度去られても、

去らるゝに定まりし前世の約束と思ひ諦むれば、悔みもせぬ、憎うもない。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らば譏れ指も差せ。子の不憫さには代へぬぞ」

と、老いの繰言息弱り。

「半兵衛めは遠州へ失せて留守の内とな。その留守合点。万一失せたりとも物言ふな、顔も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入りさせる。苦に持つて煩ふな。ノウ姉、下々は野へ往つらん。茶沸いて千代めに中食させてたもれや」

と、余念なき父の顔、

姉は悦び、

「コレお千代、案じたとつ様の御機嫌日本一。お傍離れず御介抱申しや。嬉しや胸が開けた」

と、障子を引き立て引き立つて、勝手へ

出づる折こそあれ。

門に

「物まう、頼みませう」

「どなた」

と答へ

入るを見れば、

千代が夫の半兵衛、

『さてこそ縁を切りに来た』と思ふ心に口どまぐれ、

「去り状さん、ようござつた」

と言へども

なんの気も付かず、旅出立の儘笠取つて沓脱ぎに草鞋の紐、心も解けて

「やおかる様、どなたも変ることあるまい。国元へ参る時分は、事急にて知らせもいたさず。気の付かぬ親共、留守の内にもさぞ御無沙汰。拙者も無事に遠州より、只今罷り帰ります」

「フウ、それはな、御奇特によようお帰りなされた」

と、顔を背けて鼻遇ひ、

「男共、女子共、誰ぞお茶でも上げぬか」

と内にゐぬ人呼び立て、無益し顔の色合を、

見て取りながら半兵衛、立つも立たれず子細は知らず、

互ひの心隔ての障子、さつと開け、

「姉さん、お薬暖めて」

と出づるは女房、

「ヤアお千代、こゝにゐるか」

を聞き捨て、物をも言はずつと入り、障子をはたと引き立てたり。

「おかるさん、アレ女房、いつからこゝに。何故物は申さぬ」

と騒げども、

「物言はぬ訊聞きたくば、こなたの心にお問ひなされ。人の知つたことのように、ハ、ハ、ハ、可笑しいことではある」

と空笑ひ

取つても付かれず

『ム、ムウ』とばかり差し俯き、と胸突くより詞

なし。

奥には親のせ苦し声、

「夜短かで日の長いは、老人の身によけれどもそれも息災で駆け廻る時のこと。病み耄けて日の長いは、ハアさてく退屈で暮し兼ねる。千代よ、棚な本下してなんなりとも読んで聞かせ。かるはどこに、来て聞かぬか。我が伽せぬか、失せぬか」

と、忙しく老いの気の苛立て、

「アイく、こゝに仕事しながら、障子隔てゝ聞きませす」

と、さすが半兵衛を捨てゝも立たれず、障子の傍に立ち寄れば、

『や親仁様御病氣か、容態見たし』と言はんとせしが、無遇ひなる気をかねて、詞を留め折を待ち、共に摺り寄り聞きあたる。

千代は数多の本取り出し、

「伊勢物語、塵却記、とゝさんの傍にあるまい網島の心中もござんする。徒然、平家物語。とゝさん、どの

本がよからうぞ」

「姉が読みさいた平家物語、祇王が段を聞かう。読みやれ」

「誠に、紙を付けた所がある」

と押し開き、

『母の刀自、泣くくまた教訓しけるは、天が下に住まん者、ともかうも入道の仰せは背くまじきことであるぞ。千年万年と契るとも、やがて別るゝ中もあり、あからさまとは思へども、存へ果つることもあり。世に定めなきものは、男女の習ひなり』ほんにさうぢや」

と読みさして、我が身にあたる憂き涙、留め兼ねて泣きあたる。

父も不憫に目をしばく、

「昔も今も人の氣の、移り易き世上の習ひ。コレ、姉も聞け。平家物語を千代が身に引き比べていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衛、祇王は千代が身の上よ。その清盛が心變つて追ひ出だす。エ、憎や清盛。

去年聳入りせし折から、『不調法な娘を進上いたした。氣に入らぬことあらば、打ち叩き縛り括つても直させ、末々までも見捨てず添ふて下されかし。この度

共に三度の嫁入。在所は一所どころにて、また帰つては平右衛門、再び人中へ面が出されぬ。娘は氣に入らずとも、我れを不憫と面倒見て、必ず去つて給はるな』『オ、去るまいく。御臨終の折からは先輿は平六殿、後輿はこの半兵衛。真実の子を持つたと申し召せ。今こそ町人八百屋半兵衛、元は遠州浜松にて山脇三左衛門が倅。武士冥利、商ひ冥利、千代は去らぬ、氣遣ひするな』『ア、忝い』と手を束ね、地頭代官のその外に、一生下げぬ頭を下げし互ひの契約。

物忘れする老いの身にも、その時の嬉しさは骨身に沁みて忘れぬもの、若い成りして忘れしか。忘れぬ証拠、その身は実父の弔ひに託け、遠州へ出躲し、その後で姑に追ひ出ださせ、養子の親に我が罪を塗り付ける不孝者。義理も法も知つた奴か。あれがなんの武士の果て、鯉節の削り屑。『人でなしめに縁組んで、

あたたら娘を捨てたな。碌に吟味もせなんだか』と、死

んだ母があのお世から、恨み召されう口惜しい」

と、慎み深き堅親仁、悪口交りの口説き泣き、

二人の娘も正体涙、『とかく男に縁のない、生まれ性か』とばかりにて、声も惜しまず泣きあたる。

『さては女房去られてこゝへ戻つたか』と初めて驚く半兵衛、胸に磐石据えたる如く、呆れ返つて涙も出でず、暫し詞もなかりしが、

「エ、情けない女房。たとへ一言一宿の付き合ひにも、人の心は知るゝもの。まして足掛け二年の馴染み、子まで成したる夫の心、知つても言訳してくれぬか。親仁様の御立腹、申し開くは知つたれども、『我が罪を養ひ親に塗り付ける不孝者』との一言からは、『ゆめく存ぜぬ、我れら去りはいたさぬ』と申し分くる程不孝の上塗り。親仁様に番ひし詞、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひを晴れ給へ」

とずはと引き抜く脇差より、
おかるは早く縋り付く

千代も驚き

「ノウ悲しや。こな様に恨みはない」

と、障子引き開け走り寄り、止めても

止まらぬ男の力、

「とゝさん、頼み上げます」

と騒げど

騒がぬ平右衛門、

「お身がゐるとは知つての当て言。耳に止つての自害か、オ、よい分別。自害したらば、『あれ見よ、八百屋伊右衛門夫婦、嫁を憎んで去りし故、子は面打ちに自害せし』と、養子に悪名難を付け、口々に取沙汰せば手柄々々。止むるな娘、存分に自害召され。見物せん」

との一言に、

孝心深き肝を拉がれ、

「ハア、さうぢや誤つた。眞平」

と、額を摺り付け身を悔み、

「しからばお暇、千代も同道。いざお立ちやれ」

引き受けくずつと干し、

「半兵衛、差さう。親子夫婦が水盃」

差いつ

差されつ汲めども尽きず、飲めども酔はぬ水酒盛

不憫と思ふ親の気は、余りて色に出でにける。

「命があらばまた逢はう。死なば親子の末期の水、未
来は八功德池の水、この世に思ひ置くことない。二人
ながらお往にやれく。さらば」

と夜着に打ち凭れ、再び詞も交されぬ、

親の心に身を恥ぢて、姉につどく言ひ交し、思ひを述
べて立ち出づる

「暫し」

と、父は起き上がり、

「姉ノウ、重ねて戻らぬため、祝ふて内で門火焚け」

『エ、忌々しい』とは思へども、親に従ふ焚火の煙、

「めでたうこゝから、焚きます」

と、庭に焦がるゝ下燃えの、果ては夫婦が無常の煙、

「灰になつても、帰るな」

「エ、やつぱりわしを女房に持つて下さんすか」

「オ、たとへ死んでも体も戻さぬ、尽未來まで

女夫々々」

「エ、忝い、とゝさん姉さんも悦んで下さんせ」

と、早や締め直す抱へ帯、先を手繰つて躡り寄る。

父ははらく涙に噎び、

「半兵衛これ見や、このしどなき。連れ帰らんといふ
嬉しさに、親の病ひをかとも言はず、悦ぶ顔を見る親
の心の内の嬉しさを、叶はゞ見せて礼言ひたし。取り
締めのない愚か者、伊右衛門夫婦の気には入るまい。
頼むはそなたの心一つ。親は老い病み明日知らず。
黄泉の底の底までも、心に懸るは千代一人。明日が日
眼塞ぐとも、姉夫婦にきつと言ひ付け、二十の金
の取り遣り、いつ何時でも事欠かせぬ。随分商ひ手広
うして、娘がことを頼み入る。契約の盃せん。銚
子々々。姉よ、酒を切らせしか。親子の中に遠慮はな
い、酒と思ふ心が酒。爛鍋に水持て来い」

と、盃の出る間も焦がるゝは子故の闇、

と、その一言をこの世の名残り、

留まる名残り

行く名残り、

長き、名残りと

八百屋の段

夏も来て、青物見世に水乾く、筵庇に避けられし、日影の千代が舅の家は新靱、油掛町八百屋伊右衛門、浄土宗の願ひ手了海坊が談義に打ち込み、開帳回向の世話焼き仲間、見世は半兵衛に打ち任せ、大坂中の寺狂ひ、女房は内外に世話に五つも年老けて、朝から晩まで気は苛立て、

「この半兵衛は蔵にべらく何してゐやる。見世の売りが萎びる。ヤイ松め、きりく」と水打ちをろ。コリヤさんよ、糊かひ物が干上がるがな。取り入れ畳んで打盤出してちよきくと打て。ヤ、そのちよきくで夕飯の御根葉刻め。コリヤ松よ、今日は五日宵庚申、甲子が近い。一股大根除けて置け。ソレさんよ、茶釜の下が燃え出る」

と、商売が八百屋とて、八百色程言ひ付ける、口せか

よ。横町の山城屋から呼び込まれ、二つ三つ話したばかり。それも外のことでござらぬ。こなたに誰やら逢ひたいとて、『今朝からこゝに待つてゐる』と言ふてくれとの言伝。わしや得意を廻つて来う。こなたもちよつと行かしやれ」

と、詭へ物を取り揃え、荷拵へして出で、行く。

半兵衛は山城屋と聞くより『お千代が来たである。気取られまい』と空惚け、

「ハア、山城屋からはなんの用。どりやちよつと往て来う」

と、走り出づるを

むずと捕へ、

「息子どん、こりやどこへ」

「ヤ、山城屋から逢ひたいと」

「オ、その山城屋合点、なりませぬ。アノぬつけりとした顔はいの。こちと夫婦はなんにも知らぬと思ふてか。気に入らぬで去なした嫁、遠州戻りに在所へ寄り、よう唾へて戻つたな。常盤町の従兄が所に預けて

くと忙しきは、大晦日の生まれかや。

伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、走りの竹の子片荷には独活、生姜、青山椒、白瓜二つ」

これはさつても早いことでごんすよの

おれが戻りは、ても遅いことでごんすよの

「コリヤ野良つば、今朝卯の刻から内を出て、何時ぢやと思ふ。昼下り、どこで鼻毛をよまれてゐた。旦那衆の詭へ物、日覆ひしてさへ傷む時、高い物を天道干し。商売の杓喰らはせ、魂に覚えさせん」

と取り付けば、

半兵衛走り出で、

「母者人がこりや尤も。コレ太兵衛、どこにのらくやつてゐた。枉町の笹屋から、竹の子取りに矢の使ひ。阿波座堀の丹波屋から、栗起こせと言ふて来る。朝倉屋からは青山椒、内には切れる、返事に困つた。大儀ながら母者人の機嫌直し、つい一走り廻つておぢや」

「ハテ、わしぢやとてなんの悪い所に入つてゐまし

置き、商売に託け間がな隙がな女夫こつてり、おれが知らないでおこかいの。さぞおれがこと譏りやつろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に、随分と孝行尽くし、親には不孝尽くしや。恩知らずめ」

と、畳叩いて喚きある所へ、

青布子の西念坊、案内なしにずつと通り。

「ハイ、熊野屋の権右衛様から先だつてのお約束。宗味が刻鐘の開眼、粗相な非時いたします。講中皆お揃ひ。旦那寺も疾うお出で。御夫婦ながら只今」

と、言ひ捨て帰るそくさ坊主、未来頼むは危なもの。

「アレ親仁殿、熊野屋から呼びに来た。早よ往かしやれ、おりや往かん。きりくさしやれ」

とつとど声、

親伊右衛門は後生一遍、

「ハレか、何を喧しい、またしてもく半兵衛さへ見れば敵の様に言ふ人ぢや。世間をする若い者、呼びに来まいものでもない。少々ことは聞き逃しにしゃいの」

「ソレその結構過ぎたから、親を阿呆にしをるはいの。現在の甥の太兵衛を差し置き、赤の他人のこの野良どんに家屋敷遣るこの母、邪は少しもない」

「コレか、それは誰も知ったこと。今さら調べるごとかいの。その様な腹の立つ時は念仏が薬ぢや。とかく如来の御方便、修羅燃やすそなたを呼びに来るも弥陀如来、参るごちとも弥陀如来。機嫌直しや」と看むれば、

「イヤ、ごちと女夫が出て往て、後へお千代を呼び入れ、留守の間でほたへさすことは、なりませぬ。こなた一人参つて、わしは俄に目が眩うたとなりと、頓死したとなりと、間に合ひにやらしやれ」

「コレか。たつた今西念坊が見て往んだわいの。この伊右衛門に嘘つけか、ア、勿体ない妄語戒。この中さるお寺で、五戒の割口説聴聞した。三百戒、五百戒も、約まる所は赤貝に留まるどのお談義。半兵衛が叱らるゝも貝の業。そなたにおれが異見をするも貝の業。一蓮托生の閻のお同行」

るゝ御厚恩、肝に堪へて仇にも存ぜぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別いたしてこそ孝行も立ち世間も立つ。ところに、この度国元の留守の間に、八百屋半兵衛が母が、嫁を憎んで、姑、去りにしたと沙汰あつては、万々お千代が悪いになされませ、判官鼻頂の世の中、お前の名外出ませぬ。母の悪名を立て、若い者の人中へ面が出されませうか。親仁様にも面目失はする、こゝが一つの御訴訟。少しの間と思し召し虫を殺し、美しい千代めをお入れなされ。その上にて私が物の見事に去り状書いて隙やります。サそこが男の後見。貴人高位の娘でも夫が去るになんと申そ。時には千代めが、姑、への恨みもなく、お前を慈悲ぢやと言はせたい。十六年この方、たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中、たとへ私が先立つても、いかなる後の問ひ申ひ、百万遍の御回向より、聞き入れたとの御一言、知識長老の御十念を授かる心」

とばかりにて、女房の親と我が親と、世間の義理と恩愛と、三筋四筋の涙の糸、手繰り出だすが如くなり。

と、じやれて機嫌を取りければ。

「そんならマアこなた参らしやれ。この様な嗔恚の燃える時に念仏申せば喉にすくく立つ様な、心静めて後から参らう。エ、かて、加へてあた鈍な念仏講、こんな時は目かり利かして延ばしたがいはいの。ほんにくこちの同行に、機転の利いたが一人もない」と、怖い目知らぬ我儘たらたら、

「オ、そんなら先へ行く、後からおぢや。仏法と萱屋の雨は出て聞けど、外へ出ればまた有難いことも聞く。この度生玉の大宝寺の開帳に築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出たことぢやげな。こんなことも出にや聞かれぬ。有難い、南無阿弥陀仏」と、輪数珠繰りく出でにけり。

半兵衛一言の答へもせず、涙に暮れてゐたりしが、顔振り上げ、

「申し母者人、今めかしいことながら、武士の釜の水で育ちしこの半兵衛。二十二の歳から御面倒に預り、一人の甥御を差し置き、家屋敷商売共私へお譲りなさ

母ほいやりと笑顔して、

「ア、思ひ合ふた夫婦合ひ。誠らしうは思はねど嘘に涙は出ぬもの。真実去るが定ぢやの」

「ハテ、お前を欺す程なれば、この御訴訟は申しませぬ」

「オ、オホ、嬉しく。おれも鬼にはなりともない。必ず去りや。間に合ひ言ふて欺しやれば、コレ、この母が喉笛を出刃庖丁でちよいぢやぞや。母殺すか、女房去るか。それからはその勝手次第。アハ、ハ、ハ。ア、さらりと穢土の苦が抜けた。この世からの生き仏とおれがごと。ドレ、く、く、足軽う非時に参りましよ。こちや未来まで退き去りせぬ、閻の同行がさこそ待ちや焦がれて。なんまいだぶくく。さんよ、その成りでつい供せい。なんまいだぶくく。松よ、また見世の吊し喰らふな」

南無阿弥陀仏に取り交せて、ぶつく言ふてぞ出でにける。

お千代が重なる五月の、重き身ながら足元も、手も軽々

と帯の下、小褌引き上げちよこく走り。

「ハア久しぶりで内を見た。半兵衛さん、今日といふ今日、町内広う戻つたはいの。ア、嬉しや」

と抱き付けば、

半兵衛ぎよつとし、

「なんとして戻つた。たつた今母が出られた、道で逢ひはせなんだか」

「さればいの。母様の山城屋へ寄りしやんして、いつにない門口からにこくと、『いとしゃく、おれがちつとの思ひ違ひで苦勞させた。今から去なそのいの字も言ふまいと心に誓文立てた。娘は持たず、天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取らるゝも骨拾はるゝもそなた。随分孝行にしても。そなたもおれがいとしがる。今お念仏に参るその内に早う戻つて後に逢はう。早うくとんとんと桶な物打ち明けた様なお心。皆こなさんの言ひなし故と、ほんに男の御恩は戴いてゐても飽きはない。松よ、久しいな。最早どこも蚊があるに、女房主がなければまだ蚊帳の吊り手も

なし。アノさんが居眠りでは、袷共の洗濯も出来まい。オ、この戸棚の埃はいの、奥の炬燵もまだ寒がず、香の物も見舞ひたし。何からせうやら気がうろつく、あつた所にゐて見よ」

と、とんと座りし茶釜の前、湯を沸かして水になる、未知らぬこそ果敢なけれ。

半兵衛とかくの挨拶せず、

「コリヤ松よ、只ゐずとも蔵へ往て椎茸選れ」

と人を退け、お千代が顔をつくづくと見て、涙ぐみ、「エ、可愛や、利発な様でも女心。母の詞を真実と思ふか、言やることが皆嘘ぢや。さりながら昨日もくれぐれ言ふ通り、仏法の端も聞き入れ、物の慈悲も知つた人。我が甥を差し退け、他人の身共に跡式譲る心からは、根から歪まぬこれ証拠。人には合縁奇縁、血を分けた親子でも中の悪いがあるもの。乗合船の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人もある。人界の習はし、かうしたもの。いとしばなげに根からの悪人でもない母を、そなた故に邪見者と言はせては、女夫の者

が後生も悪い。母の機嫌よう一旦呼び返し、改めておれが手から去る筈ぢや」

「エ、すりやどうでも去らるゝか」

「ハテ、肝を潰すことかいの。死ぬるは二人が兼ねての覚悟。養ひ親に賛も付かず、在所の親の遺恨もなく、エ、さすがぢや、見事に死んだと未練者の名を取るまいため、母に向ひなんぼの詞を尽くしたと思やるぞ。書置きも認め、死装束脇差も荒布の荷へ巻き込み、この世の心懸りは微塵程もなければ、金に詰つて死ぬる心中と一口に言はれうかと、これが一つの氣懸り」

と、わつと泣けば

わつと泣き、

「こな様の孝行の、道さへ立てばわしも心は残らぬ」

と、夫婦手を取り纏り寄り、伏し沈むこそ道理なれ。

母は念仏の回向より、嫁女夫の願以此功德氣懸り、余所にゆるりとゐる空も、見世鎖し頃によつと帰り、

「ノウお千代、戻りやつたか。先にも言ふ通り、ち

つとした領解違ひで物思はせた、いとしゃの。ほんの生き如来が見たくばおれぢやと思や。長うもない浮世に、酷い辛い目見て何にせう、ノウ嫌やの。これ半兵衛、走りの出刃包丁よう研がして置いたぞや。ちよつと触つても劍ぢやぞ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀

仏」

と半兵衛に合図の詞、嫁は知らぬと思ひ込む、こればかりは仏なり。

夫婦は母の機嫌顔、見ればこの世の本望と、思へど寂は雨と降る、涙隠すぞ哀れなり。

「コレ半兵衛、なんにも忘れたことはないか。日の長い時は、得て物忘れするもんぢや。よう思ひ出しや。お千代、泣かずとこゝへおぢやいの。ハレまだおれが

怖いか。こゝへく」

と猫撫で声、

「アイく、お傍へ参ります」

と、立ち寄らんとする所を、

半兵衛取つて突き退け、

「女房ばかりは親の儘にもならぬ。身が気に入らぬ、
去つたく、出て失せい。コリヤさんも丁稚もよう聞
け。半兵衛が女房去つたぞ。向ひ隣町内でも、母の
浮名を立てたらば聞くことでない。うろくせずと、
出て失せい」

と、真顔に睨む

目に涙、

「コレ嫁御、おりや去らぬぞや。親の儘にもならぬは
女夫、是非がない。おれを恨みと思やるな」

と言へども

なんの返答も、泣き入りくしゃくり泣き。

「ム、その涙はまだ母に恨みがあるさうな。サある
なら言や、聞きませう」

「イエ、お慈悲深い 姑御になんのく」

とばかりにて、かつぱと伏して泣きぬたり、

「オ、おのれが言ふまでもない、母者人になんの恨
み、口手間入れる面倒な」

と、小腕取つて門口に引き出たす、この身もついでに行

く、

「後にく」

と囁きて、目交ぜに宿の名残りの涙、

弱る心を見られじと、門口ぴつしやり見世ぐはつたり、
鳴るは六つか、早や初夜か、時も時分もろくくに、胸
はわけなき五々八々、知死期近づくばかりなり。

飽かぬ夫婦の生き別れ、

さすがの母も挨拶なく、お上を立つて

奥の間の、罪滅ぼしの鉦の聲、善悪照らす御明しの、

火を見るよりも

居眠る下女、

外に見る目も荒布の束、中に隠せし一尺四寸、これが冥

途の案内者、魂込むる書置き箱、

地獄へ落ちるか極楽か、末は白茶の死装束、

くるく包む毛氈も、早や紅の血を見れば、『死に損

ひはせまいぞ』と、一心は座れども、

暖簾一重あなたには、すゞとき母の鉦の聲、

胸に堪へて身も震ひ、踏み所覚えぬ差し足に、掛け金外

す手もわなく、そつと出でたる門口に

「イヤア、お千代か」

「オイン」

「サア、鰐の口を逃れた。おぢや」

と手を引けば、

「マ、マアく待つて下さんせ。生半一度戻つてこな
様の口から『退くぞ、去るぞ』と言はれては、未来ま
での気懸り。この門口でたつた一言、『去らぬ』と言
ふて下さんせ」

「ハテ愚痴なことばかり。今宵は五日宵庚申、女夫連
れでこの家を去る、と思へばよいはいの」

「オ、ほんにさうぢや」

手に手を取つてこの世を去る、輪廻を去る、迷ひを去る
今日は最期の羊の歩み、足に任せて

道行思ひの短夜

名残りの夏の薄衣、鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ時鳥、我れも二八の年月を、養ひ親に育てられ、子で子にならず振り捨て、死に、行く身は人ならぬ、死出の田長か時鳥。

卯月五日の宵庚申、死なば一所と契りたる、その一言は庚申、参りの人に打ち紛れ、忍び出づるも、哀れなり。

我れが恋路は糸なき三味よ、なんの音もせで待ち明かす、それぢやく

見れば思ひの雲の帯、雲の帯

さても短夜心の急くに、いざんせ

嫌と仰しやると、こちやもうさうさんせ

二人が中に名取川、オ、それ

二人と二人が名取川、それぢやく

下向の衆のぞめき歌、『それ行き過ぎし』と立ち出で

と問へば、

「ノウ死ぬる身になんの望み。水の中火の中でも、先の世までもこなさんと、女夫になつてゐるところを、見立て、死んで下さんせ」

と、さめざめ嘆けば、

「オ、過分な。この書置きにも書く通り、養子になつて十六年以來、十方旦那の機嫌を取り、隙ある日には町中を振り売りし、元は僅かの八百屋店。今では人に少々の金貸す様に儲け貯めても、辛い目ばかりに日を半日、心を伸ばすこともなく、死なうとせしも以上五度。恨みある内にもそなたに縁組み、せめての憂さを晴らせしに、それさへ添はれぬ様になり、死ぬる身にまで成り下る。よしない者に連れ添ふて、半兵衛が身の因果、そなたにまで振舞ひ、在所の親仁姉御にも悲しいことを聞かすかと、思へばこの胸に鑓を掛け、肝を猛火で煎る様な、エ、口惜しい」

と、拳を握り膝に押し付け身を震はし、涙はらく朝露に、つれて流るゝばかりなり。

て、

「今の小歌の一節に、二人と二人が名取川、オ、それぢやく」と歌ひしは」

「おれとそなたが名取川、辻占がよいこなたへ」

と、勇むは男の弥猛心、

「ア、嬉しい」

と引き連れて、共に急ぐは女氣の、情け鋭に人絶えて、物しんくたる寺町を、死に、行く身も暫くは、こゝ生玉の馬場先に、法界無縁の勧進所、無明能化の門前に、念仏を頼り辿り寄る。

「ノウお千代、心は境界に従つて転じ変るとや。そなたも千代といふ名を、風覚良訓信女と改め、我れも八百屋半兵衛を露秋禅定門と改め、息のある内より早や亡き人の数に入れば、死後の体の置き所も、俗縁を離れ寺の庭でと思へども、門開かねば力なし。

こゝは奈良の東大寺、大仏殿の勧進所。我が親は講中の第一にて、由緒ある所なれば、最期をこゝと思ひ寄る。たゞし望みもありや」

「あれまた愚痴なことばかり。在所のとゞ様姉様は、こなさんより諦めよい。水盃の上には、門火まで焚かれしは、生きて再び戻るなど、わしに異見の暇乞ひ。その愚痴なこと言ふ手間で、早う殺して下さい。アレ、アレく三方四方に半鐘が鳴る鐘が鳴る。人の来ぬ間にく」

と、急ぐ最期の玉葛、夫に纏ひ泣き沈む。

「オそれよ、それよ、よしなき悔み。最早互ひに親のこと兄弟のこと言ひ出すまい。必ずそなた言ひ出しやんな。いざこなたへ」

と、毛氈を土に打ち敷き、

「ノウお千代、この毛氈を毛氈とは思はれそ。二人が一所に法の花、紅の蓮と観ずれば、一蓮托生頼みあり。親兄弟への書置きもこの状箱に入れ置けば、明日は早々届くべし。サア、サ観念、最期の念仏怠りやるな。今が最期」

とずはと抜く

千代は合掌手を合はせ、

「南無阿弥陀仏、弥陀仏」

の声より早く引き寄せて、脇差喉に押し当つる、

「ノウ待つてたべ、待たしやんせ」

と、身を摺り退けば、

「待てとは未練な。刃物を見て俄に命惜しなつた

か、卑怯者め」

と睨め付ければ

「イヤ／＼、未練も卑怯も出ぬ。今の回向は我が身の回向。可愛やお腹なかに五月いづつきの男か女か知らねども、この子の回向してやりたい。嬉しやまめで産んだらば、どうして育てう、かうせうと、案じ置きは皆徒事あまたごと。日も目も見せず殺すかと、思へば可愛うづごさんす」

と、かつばと伏して泣き入れば、

男も声を啜り上げ、

「おれもなんの忘れうぞ。もし言ひ出したら、そなたの泣きやらう悲しさに、黙ってゐた」

とばかりにて、一度にわつと声を上げ、前後正体泣き

叫ぶ。

「サア、夜明けに間がない。明日は未来で添ふものを、別れば暫しのこの世の名残り」

十念迫つて一念の、声諸共にぐつと刺す、

喉の呼吸も乱るゝ刃、思ひ切つても四苦八苦、手足を

足掻き身を藻掻き、

卯月六日の朝露の、草には置かた毛氈の、上に亡き名を留めたり。

歳は三九の郡内綺、血汐に染みて紅の、衣服に姿掻い繕ひ、妻の抱へを二つに押し切り、諸肌脱いで我れと我が、鳩尾と臍の二所、うんと締めては引括り／＼、脇差逆手に取り持つて、二首の辞世にかくばかり。

「古を捨てばや義理と思ふまじ、朽ちても消えぬ名

こそ惜しけれ」

遙々と浜松風に揉まれ来て、涙に沈むざんざんぎの声、

三國一ぢや、我れは仏になりすます、

しやんと左手の腹に突き立て、右手へぐはらりと引き廻し、返す刃に笛掻き切り、この世の縁切る息引き切る、

哀れなりける